

<実践報告>

大学における障がい者スポーツ教育プログラムの実践事例 と効果の検証

— 「障害理解」「スポーツ価値意識」に着目して—

中山健二郎

要約

本稿は、沖縄大学人文学部福祉文化学科の障がい者スポーツ教育プログラムの概要を報告し、その効果を「障害理解」「スポーツ価値意識」の観点から分析することを目的とする。学生182名へのアンケート調査の結果、障がい者スポーツ教育のコア科目を履修した学生は障がい者とのコミュニケーションの壁が低い傾向にあることが示唆された。また、障がい者スポーツについて深く学ぶ学生は、スポーツの修養主義的側面から距離をとり「礼儀」「面白さ」「個人に合わせる」スポーツを重視する価値意識を有する傾向が示唆された。

キーワード

障がい者スポーツ、指導者養成、「障害理解」、「スポーツ価値意識」

1. 緒言

日本のスポーツ施策に関する基本理念を定めた「スポーツ基本法」(2011年施行)の前文には、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」(傍点筆者)であると記されている。すなわち、年齢や性別、障がい¹⁾の有無等にかかわらず個々人の欲求に応じてスポーツに親しめる環境を構築することは、日本社会の責務であるといえる。特に、障がいがある者のスポーツ活動推進に関しては、総則において「障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない」と明記され、その重要性が謳われている。

一方、2021年度のスポーツ実施率調査において、週1回以上運動・スポーツをする者の割合は、成人男女の全体平均56.4%に対し成人障がい者の平均が31.0%であり、障がいの有無によるスポーツ実施率の差が浮き彫りとなっている(スポーツ庁, 2022a, 2022b)。2022年度から5年間のスポーツ施策に関する指針と目標を示した「第3期スポーツ基本計画」では、「障害者スポーツの実施環境を整備するとともに、一般社会に対する障害者スポーツの理解啓発に取り組むことにより、学校体育等以外について、障害者の週1回以上のスポーツ実施率を40%程度(若年層は50%程度)、障害者の年1回以上のスポーツ実施率を70%程度(若年層は80%程度)とすることを目指す」ことが掲げられている。

障がい者スポーツの推進をめぐる課題については、住環境やスポーツ環境、関連団体のネットワークや支援の状況などが地域によって様々に異なるため、地域ごとの実情に合わせ施策を具体

化していくことが必要とされる。例えば、沖縄における障がい者スポーツの活動状況に関する調査（中山，2022）では、週1回以上の運動・スポーツ実施率自体は全国平均値より高いものの、現状の活動に満足している者よりも「もっと行いたい」「活動したいができない」と感じている者の割合がそれぞれ倍以上に及ぶことが示されており、必要な支援として「一緒に行く仲間」や「適切な指導者」といったヒトの側面に関する課題が上位に挙げられている。特に「適切な指導者」に関しては、障がい者人口に対する公認指導者資格保持者の数が全国平均に比べて少数である（中山，2021）という課題もみられる。沖縄県の障がい者スポーツ推進においては、指導者養成という点が一つの重要な課題であることが指摘できよう。この課題を受け、本稿では、県内唯一の日本パラスポーツ協会公認「初級・中級障がい者スポーツ指導員」資格取得認定校（以下、「認定校」と略す）である沖縄大学での実践事例を報告し、その効果を検証したい。

認定校における教育プログラムの実践とその成果については、保井ほか（2004，2005，2006，2007，2008，2009）が継続的に報告している。これらの論考では、大学で資格取得を希望する学生の傾向や障がい者との関わり、在学中の活動状況などがまとめられている。また、学生の活動実績を充実化させるため大学と地域団体・施設等の綿密な連携が必要とされることや、資格を取得した卒業生が継続的に資格を活用して活動することの困難性などの課題も示されている。以上の知見は、認定校の教育プログラムを整備する上で示唆に富んだものである。しかしながら、資格取得のためのプログラムを経験した受講者が「何を学び、何を得たのか」についての具体的な検証は、必ずしも詳細になされてはいない。資格取得を目的化させず、認定校に必要なカリキュラムを「大学の教育プログラム」として位置づけ評価するためには、「学びの内容と成果」を精査することが重要であろう。

内田・大谷（2013）は、大学で「障害者スポーツ実習」を受講した学生と、これまで何らかの形で「障害疑似体験」を経験した学生の「障害理解」に関する比較検討を行っている。その結果、当該大学の「障害者スポーツ実習」の受講は「障害支援」の意識醸成に寄与するものの、「障害困難」イメージの変容や「障害親近性」については必ずしも有用な影響を与えていない可能性が示唆されている。当該研究は、障がい者スポーツの教育プログラムを「障害理解」尺度という客観的な評価指標を用いて検証した点で示唆的であり、この手法は、認定校における教育プログラムの検証にも有用であるといえる。

他方、障がい者スポーツ教育は「障害理解」のみならず、スポーツのあるべき形、望ましさの志向性としての「スポーツ価値意識」にも重要な影響を与える可能性がある。なぜなら、障がい者スポーツという領域に、相対主義や身体の序列化という近代スポーツ思想のオルタナティブとなり得る実践を見出すことができる（藤田，1999）からである。すなわち、大学における障がい者スポーツ教育プログラムの成果は、福祉論に依拠した「障害理解」の観点と、スポーツ論に依拠した「スポーツ価値意識」の観点から、それぞれ客観的に分析されることが重要であるといえる。

以上の議論を踏まえ、以下2点を本稿の目的とする。

- ① 沖縄大学人文学部福祉文化学科における障がい者スポーツ教育プログラムの概要とその経過を報告する。
- ② ①のプログラムの教育効果について、「障害理解」および「スポーツ価値意識」の観点から分析する。

II. 障がい者スポーツ指導者養成と沖縄大学のプログラム

日本パラスポーツ協会公認の障がい者スポーツ指導者は、初級・中級・上級に区分される「障がい者スポーツ指導員」と、「障がい者スポーツコーチ」「障がい者スポーツ医」「障がい者スポーツトレーナー」の計6つの資格から構成される(表1)。これらの資格は、それぞれ日本パラスポーツ協会及び加盟団体等が開催する講習会の受講や、必要な活動実績を積むことなどを経て取得が可能なか、初級および中級の「障がい者スポーツ指導員」については、日本パラスポーツ協会が定める認定校において設定された基準(初級:協会カリキュラムの基準を満たす科目等の履修、中級:協会カリキュラムの基準を満たす科目等の履修および80時間の活動実績)を満たすことで取得が可能である。2022年度については、初級のみ取得が可能な認定校は157校、初級・中級の取得が可能な認定校は39校であった。沖縄県では、初級、中級ともに沖縄大学が唯一の認定校となっている(日本パラスポーツ協会, 2022)。

表1. 公認障がい者スポーツ指導者資格

資格	概要	認定校での取得
初級障がい者スポーツ指導員	障がい者のスポーツ参加のきっかけ作りを支援する指導員。健康や安全管理に配慮した指導を行い、スポーツの喜びや楽しさを伝える役割。地域の大会や教室など、スポーツ現場におけるサポートなど。	○ 科目等の履修
中級障がい者スポーツ指導員	地域の障がい者スポーツ振興のリーダーとして、指導現場で十分な知識や経験に基づいた指導をする指導員。地域のスポーツ大会や行事において中心となり、地域の障がい者スポーツの普及・振興を進める役割	○ 科目等の履修 80時間の活動実績
上級障がい者スポーツ指導員	障がい者スポーツに関する高度な専門知識だけでなく、初級・中級指導員への助言や事業の企画運営など多様なスキルを持って障がい者スポーツに関わる指導員。大会やイベント等では、関わる人をまとめ、調整・マネジメントする力を持つなど、都道府県における障がい者スポーツ振興のリーダー的役割。	×
障がい者スポーツコーチ	パラリンピックをはじめとする国際大会で活躍する競技者に対して、専門的に育成・指導ができる高度な技術を備えた指導者。都道府県の障がい者スポーツ協会や競技団体と連携し、障がいのある競技者の強化・育成などを推進する役割。	×
障がい者スポーツ医	障がい者のスポーツ・レクリエーション活動において、様々な疾患や障がいに対応し、多くの障がい者が安全にスポーツに取り組むための、効果的な医学的サポートを行う役割を担います。関係団体と連携し、医学的な視点から障がい者のスポーツ実施における健康の維持、増進、競技力の向上を推進。	×
障がい者スポーツトレーナー	スポーツトレーナーとして高い知識・技能を有し、かつ障がいに関する専門知識を有し、アスレティックリハビリテーション及びトレーニング、コンディショニング等に当たる役割を担います。障がい者のスポーツ活動に必要な安全管理や競技力の維持・向上について、関係団体と連携して推進。	×

日本パラスポーツ協会「障がい者スポーツ指導者資格」パンフレットより抜粋。

沖縄大学人文学部福祉文化学科における障がい者スポーツ教育プログラムの枠組みを図1に示す。2020年度からの科目新設、2021年度における沖縄県障がい者スポーツ協会との連携協定締結を契機として障がい者スポーツ教育プログラムの強化が図られてきた。当該プログラムの特徴として、コア科目に外部講師を積極的に招聘することで学生と地域の指導現場との繋がりを強化しようとする点、学生が主導し大学内でスポーツ教室を定期的に開催することにより実践活動を充実させつつ学びの定着を図る点などが挙げられる。

まず、コア科目については、協会との連携協定を活用し、協会理事や地域の団体で活躍する外部講師を定期的に授業に招き実践的な学びを提供してもらうとともに、講師と学生の間関係構築を促し、普段講師が活躍する指導現場へ学生がボランティア参加する流れを後押しした。また、大学で開催するスポーツ教室については、コア科目の学びを実践しつつ指導スキルを向上させる場として、2020～2021年度の2年間で計8回開催した。

これらの枠組みは、学生が地域団体との関係性と指導スキルへの自信を深めることで学外での活動実績(大会やイベントボランティア、クラブのサポート等)を充実させることに寄与(中山, 2021)し、認定校の教育プログラムにおける活動実績の積み上げの困難さという課題(保井ほか,

2007) に対して一定程度有効なシステムとして展開してきたものと思われる。

結果として、資格の取得者数²⁾は、当該プログラムが形作られる2019年度以前の平均値(初級29.8名、中級4.2名)に対し、2020年度以降では特に活動実績が必要とされる中級の資格で大幅な伸びがみられた(初級:32名、中級11.3名)。

以上の実践事例を踏まえ、以下では当該プログラムにおける教育効果を「障害理解」「スポーツ価値意識」の観点から検証する。

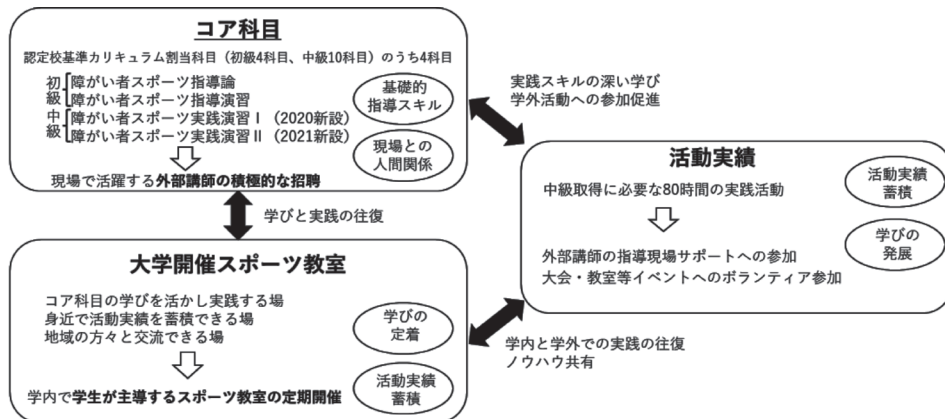


図1. 障がい者スポーツ教育プログラムの枠組み

Ⅲ. 障がい者スポーツ教育プログラムの効果

1. 調査方法

2022年4月～5月にかけて、沖縄大学人文学部福祉文化学科健康スポーツ福祉専攻の学生182名に対しアンケート調査を行った。調査項目は「学年」「障がい者スポーツ専門科目の履修状況」「活動実績の状況」「障害理解」「スポーツ価値意識」で構成した。

「障害理解」は、障がい／障がい者に対する科学的な「知識」「認識」「態度」「行動」から構成される(徳田・水野, 2005)。本調査では評価指標として標準化された「態度」を測定する多次元的態度尺度(徳田, 1990)を参照した。また、「スポーツ価値意識」については、「禁欲性—即時性」「手段性—自己目的性」の二軸での類型化を志向する上杉(1986)の尺度を参照した。大学教育プログラムの効果検証に有用であると思われる項目として「障害理解」10項目、「スポーツ価値意識」24項目を抽出し調査を実施した。なお、本調査は沖縄大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」の承認を得たうえで行っている(承認番号2022-02)。

2. サンプル特性

本調査における学年比率は1年生29.6%、2年生20.6%、3年生18.1%、4年生23.1%であった。回答者のうち21.6%の学生が障がい者スポーツに関する何らかの活動実績(大会やイベントボランティア、クラブのサポート等)を有していた。また、コア科目を履修した割合は「障がい者スポーツ指導論」35.7%、「障がい者スポーツ指導演習」33.7%、「障がい者スポーツ指導演習Ⅰ」18.1%であった。

3. 障がい者スポーツ教育プログラムと「障害理解」

「障害理解」に関する10の質問項目について5件法で回答を得たうえで、「とても思う：1点」「思う：2点」「どちらとも思わない：3点」「思わない：4点」「まったく思わない：5点」の点数を付与し、各項目の平均値を分析に用いた（平均値が1に近いほど「そう思う」5に近いほど「そう思わない」）。先述した教育プログラムの枠組みにおいて、特にコア科目による知識と実践的スキルの学習、および活動実績の積み上げが重要視されている点を勘案し、以下では活動実績の有無、およびコア科目の1つである「障がい者スポーツ実践演習Ⅰ」履修経験の有無による「障害理解」の差異を分析していく。

まず、活動実績の有無と「障害理解」の平均得点を表2に示す。活動実績の有無によって有意な差異が認められる項目はみられなかった。

表2. 活動実績の有無と「障害理解」の平均得点

	質問項目	全体	活動実績 有り (n=43)	活動実績 無し (n=136)	t 検定
Q1	障がいのある人と一緒に仕事をしてみたいと思う。	2.53	2.42	2.55	n.s.
Q2	障がいのある人と積極的に交流したいと思う。	2.31	2.23	2.33	n.s.
Q3	障がいのある人は、全ての面で劣っているわけではないと思う。	1.49	1.40	1.53	n.s.
Q4	障がいのある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感がないと思う。	1.72	1.69	1.73	n.s.
Q5	障がいのある人は、超能力を持っているわけではないと思う。	1.94	1.91	1.94	n.s.
Q6	障がいのある人は、手伝ってもらったことを当たり前とは思っていないと思う。	1.81	1.77	1.81	n.s.
Q7	障がいのある人にも気軽に声をかけられると思う。	1.93	1.98	1.91	n.s.
Q8	障がいのある人と抵抗なく話すことができると思う。	1.82	1.95	1.78	n.s.
Q9	障がいのある人が困っているとき、迷わず援助できると思う。	1.64	1.65	1.63	n.s.
Q10	障がいのある人に対して変な遠慮がないと思う。	2.24	2.12	2.28	n.s.

次に、「障がい者スポーツ実践演習Ⅰ」履修経験の有無と「障害理解」の平均得点を表3に示す。「障がいがある人と抵抗なく話すことができると思う」の項目について、当該科目の履修経験がある者の方がより「そう思う」傾向にあることが示唆された。

表3. 「障がい者スポーツ実践演習Ⅰ」履修経験の有無と「障害理解」の平均得点

	質問項目	全体	「実践演習」 履修者 (n=36)	「実践演習」 未履修者 (n=140)	t 検定
Q1	障がいのある人と一緒に仕事をしてみたいと思う。	2.53	2.67	2.47	n.s.
Q2	障がいのある人と積極的に交流したいと思う。	2.31	2.39	2.28	n.s.
Q3	障がいのある人は、全ての面で劣っているわけではないと思う。	1.49	1.39	1.15	n.s.
Q4	障がいのある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感がないと思う。	1.72	1.53	1.76	n.s.
Q5	障がいのある人は、超能力を持っているわけではないと思う。	1.94	2.06	1.90	n.s.
Q6	障がいのある人は、手伝ってもらったことを当たり前とは思っていないと思う。	1.81	1.61	1.85	n.s.
Q7	障がいのある人にも気軽に声をかけられると思う。	1.93	1.86	1.95	n.s.
Q8	障がいのある人と抵抗なく話すことができると思う。	1.82	1.56	1.89	p< 05
Q9	障がいのある人が困っているとき、迷わず援助できると思う。	1.64	1.50	1.67	n.s.
Q10	障がいのある人に対して変な遠慮がないと思う。	2.24	2.25	2.24	n.s.

「障がいのある人と抵抗なく話すことができると思う」ということは、障がいがある人とのコミュニケーションの壁が低いことを意味している。コア科目の履修経験による知識と指導スキルの深まりが、活動現場における円滑なコミュニケーションに寄与する可能性が推察されよう。また、活動実績の有無よりもコア科目履修経験の有無によって「障害理解」の差異が認められたこ

とも示唆的である。「現場経験でこそ理解を深められる」という考え方もあるものと思われるが、上記の結果は「知識が身につくについて初めて理解を深められる」という捉え方の重要性を示すものであり、経験に偏重し知識面を等閑視しないよう留意する必要があるといえる。

4. 障がい者スポーツ教育プログラムと「スポーツ価値意識」

次に、「スポーツ価値意識」に関する24項目について、「障害理解」と同様に5件法で得点を付与し、活動実績の有無、および「障がい者スポーツ実践演習Ⅰ」履修の有無による「スポーツ価値意識」の差異を分析していく。

活動実績の有無、および「障がい者スポーツ実践演習Ⅰ」履修経験の有無と「スポーツ価値意識」の平均得点をそれぞれ表4、表5に示す。

表4. 活動実績の有無と「スポーツ価値意識」の平均得点

	質問項目	全体	活動実績 有り (n=43)	活動実績 無し (n=136)	t検定
「禁欲性—即時性」に関する項目					
Q11	きびしい練習のなかで鍛錬したい。	2.25	2.42	2.19	n.s.
Q12	スポーツで自己の限界に挑戦したい。	1.78	2.00	1.72	p<.05
Q13	どこまでも技術の向上をめざしたい。	1.49	1.62	1.46	n.s.
Q14	いつでもやめられる気楽さをもってスポーツをしたい。	2.62	2.49	2.66	n.s.
Q15	勝ち敗けにこだわらず気軽に試合をしたい。	2.97	2.88	2.99	n.s.
Q16	きびしい指導をうけてまでもスポーツをしたくない。	3.13	2.78	3.24	n.s.
Q17	競技会・大会をめざしてがんばりたい。	1.76	1.86	1.72	n.s.
Q18	ひとつのスポーツに打ちこみたい。	2.42	2.40	2.42	n.s.
Q19	自分のレベルにあった試合を楽しみたい。	2.69	2.48	2.76	p<.05
Q20	体に無理のない程度にスポーツをしたい。	2.54	2.36	2.60	n.s.
Q21	スポーツのなかで苦しさを克服したい。	2.16	2.24	2.14	n.s.
Q22	スポーツに自分の全てを出しつきたい。	1.88	1.95	1.85	n.s.
「手段性—自己目的性」に関する項目					
Q23	目的にしばられずに、スポーツそのものの面白さ（楽しさ・よろこび）を味わいたい。	1.62	1.35	1.71	p<.05
Q24	あそびとしてスポーツを行いたい。	2.35	2.28	2.38	n.s.
Q25	目的をもたずに面白さを味わうだけでは、スポーツをする意味がない。	3.40	3.35	3.41	n.s.
Q26	スポーツを通して社会生活に役立つものを得たい。	1.68	1.74	1.66	n.s.
Q27	スポーツを通して人間形成をはかりたい。	1.62	1.60	1.62	n.s.
Q28	スポーツを通して礼儀・作法を身につけたい。	1.56	1.67	1.51	n.s.
Q29	人間形成や礼儀作法を身につけることよりも、スポーツの面白さを味わうことを大切にしたい。	2.34	2.63	2.24	p<.05
Q30	スポーツを通して強い精神力を身につけたい。	1.65	1.81	1.60	n.s.
Q31	スポーツを通して積極的に体力づくりをしたい。	1.56	1.63	1.53	n.s.
Q32	スポーツを生活の気晴らしのひとつとして行いたい。	1.65	1.53	1.67	n.s.
Q33	試合では、勝敗をあらそう面白さを味わうだけでなく、そこから何かをつかむことが大切である。	1.55	1.63	1.51	n.s.
Q34	スポーツは何かを得るための手段である。	1.67	1.67	1.66	n.s.

表5. 「障がい者スポーツ実践演習Ⅰ」履修経験の有無と「スポーツ価値意識」の平均得点

質問項目	全体	「実践演習」 履修者 (n=36)	「実践演習」 未履修者 (n=140)	t 検定
「禁欲性—即時性」に関する項目				
Q11 きびしい練習のなかで鍛錬したい。	2.25	2.39	2.22	n.s.
Q12 スポーツで自己の限界に挑戦したい。	1.78	1.89	1.77	n.s.
Q13 どこまでも技術の向上をめざしたい。	1.49	1.54	1.50	n.s.
Q14 いつでもやめられる気楽さをもってスポーツをしたい。	2.62	2.80	2.53	n.s.
Q15 勝ち敗けにこだわらず気軽に試合をしたい。	2.97	2.74	3.00	n.s.
Q16 きびしい指導をうけてまでもスポーツをしたくない。	3.13	2.74	3.21	p< 05
Q17 競技会・大会をめざしてがんばりたい。	1.76	1.86	1.72	n.s.
Q18 ひとつのスポーツに打ちこみたい。	2.42	2.54	2.40	n.s.
Q19 自分のレベルにあった試合を楽しみたい。	2.69	2.91	2.60	n.s.
Q20 体に無理のない程度にスポーツをしたい。	2.54	2.49	2.55	n.s.
Q21 スポーツのなかで苦しさを克服したい。	2.16	2.11	2.18	n.s.
Q22 スポーツに自分の全てを出しつきたい。	1.88	2.03	1.83	n.s.
「手段性—自己目的性」に関する項目				
Q23 目的にしばられずに、スポーツそのものの面白さ（楽しさ・よろこび）を味わいたい。	1.62	1.58	1.62	n.s.
Q24 あそびとしてスポーツを行いたい。	2.35	2.17	2.39	n.s.
Q25 目的をもたずに面白さを味わうだけでは、スポーツをする意味がない。	3.40	3.78	3.32	p< 05
Q26 スポーツを通して社会生活に役立つものを得たい。	1.68	1.89	1.63	n.s.
Q27 スポーツを通して人間形成をはかりたい。	1.62	1.67	1.60	n.s.
Q28 スポーツを通して礼儀・作法を身につけたい。	1.56	1.69	1.52	n.s.
Q29 人間形成や礼儀作法を身につけることよりも、スポーツの面白さを味わうことを大切にしたい。	2.34	2.77	2.20	p< 05
Q30 スポーツを通して強い精神力を身につけたい。	1.65	1.86	1.59	n.s.
Q31 スポーツを通して積極的に体力づくりをしたい。	1.56	1.64	1.52	n.s.
Q32 スポーツを生活の気晴らしのひとつとして行いたい。	1.65	1.50	1.65	n.s.
Q33 試合では、勝敗をあらそう面白さを味わうだけでなく、そこから何かをつかむことが大切である。	1.55	1.78	1.48	n.s.
Q34 スポーツは何かを得るための手段である。	1.67	1.78	1.61	n.s.

活動実績がある者の方が無い者より「スポーツで自己の限界に挑戦したい」「人間形成や礼儀作法を身につけることよりも、スポーツの面白さを味わうことを大切にしたい」について「そう思わない」傾向にあり、「自分のレベルにあった試合を楽しみたい」「目的にしばられずに、スポーツそのものの面白さ（楽しさ・よろこび）を大切にしたい」について「そう思う」傾向にあることが示唆された。また、「障がい者スポーツ実践演習Ⅰ」の履修経験がある者の方が無い者より「目的をもたずに面白さを味わうだけでは、スポーツをする意味がない」「人間形成や礼儀作法を身につけることよりも、スポーツの面白さを味わうことを大切にしたい」について「そう思わない」傾向にあり、「きびしい指導をうけてまでもスポーツをしたくない」について「そう思う」傾向にあることが示唆された。活動実績のある者、およびコア科目の履修経験がある者など「障がい者スポーツの学びに深く関わった者」の「スポーツ価値意識」として、「限界への挑戦」や「厳しい指導」などスポーツの修養主義的側面から距離をとり、「礼儀」や「面白さ」「個人に合わせる」という点を重視する傾向が推察される。

IV. まとめ

本稿では、沖縄大学人文学部福祉文化学科における障がい者スポーツ教育プログラムの概要および経過を報告し、その効果として主に以下の点を析出した。

- ・障がい者スポーツ教育プログラムのコア科目として、外部講師を招き知識と指導スキルを実践的に学ぶ科目を履修した学生は、相対的に障がいがある者とのコミュニケーションの壁が低い傾向にある。
- ・障がい者スポーツの学びに深く関わった学生は、相対的にスポーツの修養主義的側面か

ら距離をとり、「礼儀」や「面白さ」「個人に合わせる」という点を重視する傾向にある。なお、本稿では教育の効果検証について、既存の尺度を参照して量的に測定し分析しているが、より具体的に「どのような学びのプロセスでこの効果が得られたのか」を検討するためには、質的なアプローチによる効果検証も必要とされよう。今後の課題としたい。

<付記>

本稿で報告したプログラムは「沖縄大学教育助成費」を受けて実施したものである。

<注>

- 1) 「障害(がい)」の表記について「害」の漢字を用いることに否定的な見解がある(内閣府, 2010, pp.6-7) ことに鑑み、本文中では基本的に「障がい」の表記を用いる。ただし、公文書その他文献の引用、尺度や概念の名称、制度名や団体名等の固有名詞などについては元の表記に従う。
- 2) 本稿執筆時点では2022年度の資格は申請手続き中・交付前の状態であるため、2022年度の実績のみ取得者数ではなく申請者予定者数でカウントしている。

<引用・参考文献>

- 藤田紀昭(1999)「スポーツと社会福祉—障害者スポーツをめぐる—」井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社, pp.283-298
- 中山健二郎(2021)『『中級障がい者スポーツに指導員』資格取得認定校における実践事例—大学と外部団体の連携による学生の活動実績充実に向けた取り組み—。九州レジャー・レクリエーション学会『第33回九州レジャー・レクリエーション学会福岡大会発表プログラム・抄録集』, p.11
- 中山健二郎・手登根雄次(2022)「沖縄における障がい者のスポーツに実施状況—2021年アンケート調査の分析—」沖縄大学地域研究所『地域研究』第29号, pp.31-45
- 内閣府(2010)「障害」の表記に関する検討結果について。 https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kaikaku/s_kaigi/k_26/pdf/s2.pdf (2022年12月30日閲覧)
- 日本パラスポーツ協会(2022)「障がい者スポーツ指導員資格取得認定校一覧(都道府県別)」 <https://www.parasports.or.jp/leader/data/2022/2022%E8%AA%8D%E5%AE%9A%E6%A0%A1%EF%BC%88HP%EF%BC%89.pdf> (2023年1月4日閲覧)
- スポーツ庁「スポーツ基本法」 https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm (2022年12月30日閲覧)
- スポーツ庁「第3期スポーツ基本計画」 https://www.mext.go.jp/sports/content/000021299_20220316_3.pdf (2022年12月30日閲覧)
- スポーツ庁(2022a)「令和3年度『スポーツ実施状況等に関する世論調査』の概要」 https://www.mext.go.jp/sports/content/20220222-spt_kensport01-000020451_1.pdf (2022年12月30日閲覧)
- スポーツ庁(2022b)「令和3年度『障害者のスポーツに参加促進に関する調査研究』の概要」 https://www.mext.go.jp/sports/content/20220222-spt_kensport01-000020768_5.pdf (2022年12月30日閲覧)

- 徳田克己 (1990) 「障害児・者に対する態度を測定するための多次元的态度尺度の開発 (1) — 全体構成と妥当性の検討—」『桐花教育研究所紀要』第3号, 21-29
- 徳田克己・水野智美 (2005) 『障害理解—こころのバリアフリーの理論と実践』誠信書房
- 内田若希・大谷まや (2013) 「障害者スポーツ実習と障害疑似体験における障害理解の差異の検討」日本アダプテッド体育・スポーツ学会『障害者スポーツ科学』11巻1号, pp.33-41
- 上杉正幸 (1986) 「大学生のスポーツ価値意識について (5) —数量化によるパターン分類—」香川大学『香川大学教育学部研究報告, 第I部』第67号, pp.21-35
- 保井俊英・永田隆子・田中美紀・藤原進一郎 (2004) 「『障害者スポーツ指導員』資格取得者の現状について」『武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学編) 51巻, pp.49-55.
- 保井俊英・永田隆子・田中美紀・藤原進一郎 (2005) 「『障害者スポーツ指導員』資格取得者の現状について (2) —ボランティア活動の特徴—」『武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学編) 52巻, pp.75-83.
- 保井俊英・永田隆子・藤原進一郎 (2006) 「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員資格申請について—3年間の指導実績」『武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学編) 53巻, pp.51-58.
- 保井俊英・永田隆子・三上真二・藤原進一郎 (2007) 「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員資格取得者のための指導経験について」『武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学編) 54巻, pp.21-28.
- 保井俊英・永田隆子・三上真二・藤原進一郎 (2008) 「『障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員』資格取得者の意識と指導実績について」『武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学編) 55巻, pp.107-113.
- 保井俊英・永田隆子・濱屋桃子・三上真二 (2009) 「『障害者スポーツ』に対する意識レベルについて—障害者スポーツ中級スポーツ指導員資格取得に結びつけるためには—」『武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学編) 56巻, pp.127-181.